『平家正節』の譜記によるアクセント型の認定について

―― 1拍名詞を素材として ――

上　野　和　昭

はじめに

安永五年（1776）に荻野検校によって作成された『平家正節』（以下『正節』と略称する）の譜記は、近世中期あるいはそれ以前の京都アクセントの資料として長く利用されてきた。これを早く紹介した金田一春彦（1959＝2001:pp.2-20）、奥村三雄（1981）ほかの業績については、いまさら言うまでもないことであるが、近くは石川幸子（1995.12）によって音楽的曲節の「墨譜群」も検討され、この方面の研究は新たな進展を見せるに至っている。

ところで、奥村三雄が平曲譜を精査し、施譜された語のアクセントを推定して、近世京都アクセントの体系をほぼ明らかにしたことは周知のことで、その功績は高く評価される。しかしなお、平曲譜からのアクセント推定がすべて終わったというわけではない。譜記解釈にはいくつかの問題があり、一々の語のアクセント型認定において、それがすべて説明し尽くされてはいないように思う。

たとえば、複合語からその構成要素である単純語のアクセントをいかに抽出するかという問題がある。これについて奥村は「分析的立場」を貫いているが、それがいつも適切であるとは言いかねるように思われる。また、いわゆる「低起無核」語の遅上がり現象を反映した譜記であるかどうかを判定する場合も、これを積極的に認定するかどうかで、結論にはいくつかの違いが出てくる。さらにまた、当時の京都にそのような区別があったかどうかはともかく、少なくとも施譜者の意図として、同じ「おほや（大矢）」という語に「大きな（長い）矢」●●○（H2）型と「長い矢を使う武者」●○○（H1）型、それに姓名○●○（L2）型とで、そのアクセントに違いがあったらしいことなど、補うべき情報もまだまだあろう（以下、高拍を●、低拍を○、下降拍を◐、上昇拍を◑であらわす。とくに助辞について明示する場合には、▼や▽も用いる。アクセント型を問題とする場合にかぎり、便宜的に高起式Hと低起式Lの符号と、その直後に下降する拍が語頭から数えて何番目かの数字であらわすこともある）。

ここでは、1拍名詞を素材にして、そのアクセント型認定の問題を検討する（語彙一覧などは後出）。それについて本稿の立場を明確にしておきたい。まず、平曲譜は『正節』を用いる。『正節』にも京都名古屋系、江戸系の違いがあり（薦田治子2003:pp.191-214）、本稿

では東京大学蔵青洲文庫本（江戸改訂本）をもとに、荻野検校編纂本（尾崎本＝京都名古屋系）、京都大学蔵『平曲正節』と早稲田大学演劇博物館蔵『平家物語節附本』（いずれも江戸系＝岡正武校合・浄書本）、それに東京芸術大学附属図書館蔵『平家正節鈔』（江戸系＝津軽系本）を参照する（諸本の異同は必要に応じて記す）。『正節』系以外の譜本は扱わない。

次に音楽性のない《白声》（ハヅミを含む）と、それの希薄な《口説》（シヲリ口説を含むが、下ゲの類は除く）の曲節にあらわれる用例だけを検討する。このことは、さらに音楽的曲節にまで解明の手が及ぼうとしている現状に鑑みて後退だという批判もあろう。しかし音楽的曲節からアクセントを推定する研究も、中世から近世にかけての京都アクセントがある程度分った上で、それとの相互参照によってはじめて進展するものであるから、いま一度基礎的な作業を確認しておくことの意味はあるものと考える[1]。

《白声・口説》を扱う理由は、これらが音楽性に乏しく、話し言葉の音調と比較的よく対応する譜記をもつことによる。音楽性に富む曲節は、その定まった旋律の制約からアクセントを生かさない場合もあるので、まずはこれら《白声・口説》の曲節から用例を集めて、それぞれの語のアクセントを推定する。とはいえ、《口説》の音楽性は皆無ではなく、譜記と音調との対応には特別な注意が必要である。音楽性のない《白声》とて、無譜部分をいつもアクセントの低い部分と解釈してよいとばかりはいえず、そこに実際上の問題が潜むことは言うまでもない。本稿は、それに注意しつつも両曲節の譜記から具体的に語単独のアクセント型を認定する経緯を明らかにして、譜本の効用と限界とを論ずる[2]。

ところで、《白声》と《口説》とはアクセント史の上で一様のものか、という問題がある。本稿ではひとまず、これを区別しつつも同等に扱う。そして、この両者の間に対立がみられる場合にのみ、その違いを指摘する。具体的には、それぞれの語についてａ単独形、ｂ従属式助辞接続形、ｃ低接式助辞接続形、ｄ助詞「の」接続形、それにｅ接辞接続形などの譜記から、語単独のアクセント型を認定する。もちろん『正節』の譜記は、一次的には《口説》では旋律を、《白声》では文音調をあらわしていること（石川幸子1995.4）勿論であるが、譜記そのものから直接的に拍内上昇や拍内下降を知ることはできない。したがって『正節』の譜記から、そこにあらわれるさまざまな文脈の音調を考察して、ｂｃｄのごとき語句の準アクセントを把握し、それをもとに語単独のアクセント型を推定することになる。ただし、問題となる語が複合語の一部になりきっている場合、そこから抽出してアクセント型を論ずることは差し控える（金田一1982:p.88参照）。

単独形および助辞接続形からの推定

『正節』においては、各々の語がそれぞれの文脈の中で、さまざまな助辞（助詞・助動詞）をともなってあらわれる場合がほとんどである。したがって語単独のアクセント型を特定する場合は、そのような助辞との関係を考慮したうえで、型の特定が可能な場合と、可能性の域に止まる場合とを、明確に把握しておかなければならない。

はじめに、助辞などの付かないａ単独形（一語一文節の形）について簡単に触れておきたい。『正節』の譜記では、１拍名詞単独形の場合には、どのような語であれ｛上｝または

｛コ｝いずれかの譜が付けられる。たとえば（1）の例がそれである（〈 〉内は東大本『正節』本文の振り仮名、［ ］内は同じく発音注記、｜｝内は抽出した本文のそれぞれの拍に対する譜。｛上｝はジョウの譜、｛コ｝はコジョウの譜のこと。｛×｝は無譜の箇所をさす。なお平仮名の振り仮名は必要に応じて私に補ったものである）。

（1）毛生〈ライ〉つゝ ｛コ××××｝11下納死3－1口説／日暮れぬ ｛上コ××｝ 1下那須2－2口説[3]／火出ル程に ｛上上××××｝ 8上橋合24－2口説

ただし（2）のような例は、語単独形が無譜部分と対応していて例外となる（下線部）。しかし、これらはたとえ一語一文節ではあっても前接語との繋がりが強く、直前の高拍に対して低拍を表わしているとも理解できるところである。「日」はふつうには◐であるから、「七日の日」を●●●▼○と解しては問題かもしれないが、●●●▼◐からの変化形であろうか。「或る夜」は○●・◑が接合して準アクセントを形成した○●○に対応する譜記とも理解できるから、「夜」の低起性を反映しているともみなすことができよう。

（2）七日（なぬか）の日（ひ） ｛上上上上<u>×</u>｝ 1上厳還17－1素声／或る夜（よ） ｛×上<u>×</u>｝ 7上東下6－4口説

しかし、このような直前の高拍に低接する例は、1拍名詞に限らず数多くあらわれ、また単独形ばかりか各種の助辞接続形にも出現する。そして直前に音調の切れ目があるかどうか、意味的な続き具合はどうか、句読点や琵琶の手の指示があるかなどにも注意して分析しなければならない。施譜者の意図を斟酌する場合も出てくる。このような「前高低平形」は、アクセント型を検討するに際して扱いが難しく一律に処理することはできないので、本稿ではこれらを、アクセント型を認定する上に、積極的に利用することはしない。

しかしb従属式助辞（が・に・を……）接続形となると、その文節アクセントの違いははっきりする。これは、施譜者がその語に対し積極的に施譜していれば（以後、このことは一々断らない）必ず下表のように区別されると言ってよい。また、c低接式助辞（か・ぞ・と・へ・も・まで・より……）接続形では、第一類と第二類相当の●▽のアクセントは譜記に差がない。第二類相当のものは、あるいは◐▽だったかもしれないが、それは譜記にはあらわれないからである（低接式助詞「そ」は「誰そ」の場合は例外的に●▼となる）。さらに第

【表】 1拍名詞の各形別譜記とアクセントとの対応表

	a単独形		b従属式助辞接続形		c低接式助辞接続形	
第一類相当	●	上／コ	●▼	上上／上コ	●▽	上×／コ×
第二類相当	◐	上／コ	◐▽／●▽	上×／コ×	◐▽／●▽	上×／コ×
第三類相当	◑	上／コ	○▼	×上／×コ	◑▽〈白？〉	上×／コ×
					○▼〈口〉	×上／×コ

	d助詞「の」接続形		e1接辞接続形「おん～」		e2接辞接続形「～ども」	
第一類相当	●▼	上上／上コ	○●=● ○○=●	×上上／×上コ ××上／×××コ	●=●○	上上×／上コ×
第二類相当	●▽	上×／コ×	○●=◐／○		◐／●=○○	上××／コ××
第三類相当	(◑▼)／●▼ ●▽ ○▼	上上／上コ 上×／コ× ×上／×コ	○●=○ ○○=●	×上×／×コ× ××上	○=●○	×上×／×コ×

a形～e2形それぞれについて、左欄がアクセント、右欄が譜記。助辞は1拍のもので代表させた。／は「または」の意。〈白・口〉は〈白声・口説〉のこと。なおe1第二類相当には施譜例がない。

三類相当のものは、◑▽を反映するように施譜すれば｛上×/コ×｝となる可能性も考えられるが、上記のb従属式助辞接続形で類別が明確であり、かつ歴史的にも方言対応の上からも類別が確定的な語（《金田一語類》を補訂した《早(稲田)語類》による、秋永ほか1998）についてみるかぎり、◑▽の反映と思しき譜記は1例しか認められない。この場合ほかの例は○▼が多いから、「低接式」という呼び方には合致しないことになる。下記（3）参照。全体に例数が少なく推測の域を出ないが、一応《口説》○▼：《白声》◑▽という対立の可能性もあると考える。《白声》の｛上×｝は現代京都にも聞かれる●▽かもしれないが、いまは伝統的な◑▽と解しておく（奥村1981:pp.445-446）。

（3）［○▼｛×上/×コ｝の例］野も｛×上｝8上富士8-3口説・19-5口説／目と｛×上｝8下能登11-1口説／目も｛×コ｝3下先帝4-1口説

［◑▽｛上×｝の例］目も｛上×｝15上内女15-3素声

d助詞「の」接続形でも問題になるのは第三類相当の語である。『正節』からは（4）に示すように、それぞれの音調に対応する譜記が採集できる。

（4）［◑▼/●▼～｛上上～｝の例］火の中｛上上××｝五句高野5-3素声／目の前に｛上上×××｝5上燈籠2-1口説　［●▽～｛上×～｝の例］手の舞イ｛上×××｝12上行隆17-3口説　［○▼～｛×上～｝の例］目の様ウなる｛×上コ×××｝10上物怪7-4口説

「木<コ>の葉を｛上×××｝」（1上卒都6-4口説）、「木<コ>の実を｛コ×××｝」（2上蘇武6-5口説）のような例を考え合わせると、これらは古く複合して一語相当になり○○◐/○○●＞●○○の変化を経たものと考えられるから、あらゆる場合に文節単位にのみ考えて、○▽＞●▽の変化ばかり想定しなくとも説明できるのではないか。とすれば、「火の中」や「目の前」のごときも○○○●＞●●○○あるいは○○○◐＞●●○○のような変化を経たと考えたい。「目の前」は現代京都でも●●○○（『日本国語大辞典』第二版、以下「日国」）である。文節単位で考えても、◑▼は後に○▼になりこそすれ、●▼へ変化することはなかったのではないか[4]。

いまひとつ●▽～の例についてであるが、これも「手の舞」という、「足の踏所」と対比的に用いられた慣用的な語句であるから、あるいは○○●●＞●○○○の変化を経たかとも考えられる。しかし、ほかの第三類相当と考えられる語（鹿（か）、紀伊（き）、摂津（つ））には●▽もある。これらは○▽＞●▽という変化を経たと解釈するしかないであろう[5]。

以上の検討から1拍名詞第三類相当の語に「の」が接続する場合は●▽のほかに○▼や●▼が聞かれたと理解してよいようである。ただし、●▽・●▼については、それぞれに「の」を越えて後接の語と早く複合していた可能性も考えてよい。

接頭辞前接形・接尾辞後接形からの推定

続いてe1接頭辞「おん」やe2接尾辞「ども」の接続した形の譜記から、その語単独のアクセント型を推定する方法を検討する。もともとこれらは複合が緩く、一般の複合語よりは、中核となる語のアクセントを抽出しやすい。

接頭辞「おん（御）」前接形には、○●……または高さを次に送った○○……に対応する譜記が見られる。はじめに2拍名詞に前接した代表的なものを、それから解釈されるアクセントとともに例示すれば、（5）のような違いが確認できる。

（5）「御様」（○●=●●～）○○=●●/「御事」○●=●○～○○=●○/「御船」○●=○○

これらから1拍名詞の接頭辞「おん（御）」前接形のアクセントを推定すると、第一類相当の語は○●=●～○○=●、第二類相当の語は○●=◐～○○=◐、第三類相当の語は（○●+◑>）○●=○となるであろう。そこで、実際に『正節』にあらわれるものを検討してみると、下記（6）のような例を拾うことができる。第二類相当の語例はない。

（6）御ン子と ｛×上コ×｝ 7上廻文11-4口説／御ン身を ｛××上コ｝ 10下北方4-4口説／御ン手とこそ ｛×上××××｝ 6下木最12-3白声／御ン目も ｛××上×｝ 12上許文19-1素声

第三類相当の語に○○=●という形が出てきて○●=○ばかりではないが、少なくとも○●=○に対応する譜記があれば、第三類相当であることは明確である（「御ン乳<チ>」○●=○からは「ち（乳）」◑が抽出できる）。しかし「おん～」形が○●●や○○●というだけでは、どのグループなのか確定できない[6]。

次に、接尾辞「ども」（複数の意）が2拍名詞に接続した例を見る。

（7）「首ども」●●●○/「馬ども」●○○○/「船ども」○●●○～○○●○

2拍名詞第一類相当の●●型の語に「ども」が後接すると、「ども」自体のアクセント●○も生かして●●=●○となる。第二・三類相当の●○型の語に後接する場合はこれに従属して●○=○○となり、「ども」自体のアクセントは抑えられる。また第四類相当の○●型に後接する場合は「ども」のアクセントも生きて、中核となる語の高さがそこに送られることもある。第五類相当の語は『正節』から採集できなかったが、あれば○◐=○○または○●=○○であろう。従属式助辞と同じ接続のしかたをする。これに類推して1拍名詞に後接する形のアクセントを推定すると、第一類相当の語は●=●○、第二類相当の語は●=○○（◐=○○）、第三類相当の語は○=●○（◑=●○）となろう。

そこで、実際に『正節』を検討してみると、次のような例を拾うことができる。

（8）屋<ヤ>ども ｛上××｝ 4上都還6-2口説／矢ども ｛上××｝ 14上一魁30-2素声／田ども ｛×コ×｝ 13下法住1-4口説／句<ク>ども ｛×コ×｝ 12上御産18-3口説

したがって「屋・矢」は第二類相当、「田・句（漢語）」は第三類相当と結論して誤るまい。ただし、第一類相当のものに付いた「子ども」●●●は特例である。本来ならば●●○となるところ、複合が進んで「ども」の接尾辞としての機能が希薄になり、さらに「ども」が添加された「子供ども」という形さえ『正節』には存在する。

このほかの接尾辞「たち（達）」、接頭辞「み（御）」が付く場合も調べたが、中核となる語のアクセントを推定するには結合の度合いが強すぎる（秋永1980:pp.430-433も参照）。漢語に付く接頭辞「ご（御）」「ぎょ（御）」、また和語に付く「お」前接形も変化形が多く、

ここでの素材にはしづらい（「お」前接形は秋永1980:pp.434-435参照。「ご」前接形には規則的な対応をみせるものもある）。

1拍名詞のアクセント型を認定する原則

以上のことから、『正節』の譜記によって1拍名詞単独のアクセント型を認定し、それを第一類から第三類に分類するには、以下のような原則を立てればよいことになる。なお、漢語の場合は第一類相当と第三類相当のものしかない。

1．a単独形の譜記は各類みな同じであり、それだけから類別することはできない。
2．b従属式助辞接続形の譜記からは、明確な分類ができる。
3．c低接式助辞接続形に｛×上/×コ｝の譜記があれば、その語は第三類相当である。
4．d助詞「の」接続形に｛×上/×コ｝の譜記があれば、その語は第三類相当である。
5．e2接尾辞「ども」後接形からは、分類が可能である。またe1接頭辞「おん」前接形は、｛×上×/×コ×｝の譜記があれば、その語は第三類相当である。

ところで、単独形または助辞接続形に全く譜記がなく、後続する語が高く始まっている場合（以下「低平後高形」とよぶ）、これを第三類相当の語と見なしてよいか、という問題がまだ残っている。次のような譜記から「手・火」を第三類相当と結論できるであろうか。

（9）手は利（き）イて（候ふと）｛××上×××－｝ 1下那須6-5白声／火をたきあぶりなんど（しければ）｛××コ×上×××××－｝ 2上文強10-1口説

『正節』において、いわゆる「低起無核」語は、三拍目以降に上昇する音調と対応する譜記をもつことがあるから、このようなものも一応は高さを次に送ったとして理解することはできる。しかし、後者は「焚き、炙り」という二つの動詞に焦点をあてた施譜とも考えられ、「火を」の部分はアクセントが抑えられたと解釈する余地も残る。前者も「利イて」を強調したという理解もできよう（石川幸子1997:p.10）。

また次のような例は「木へ」であるから低接式助辞が付いているので、現代京都ならば◑▽または●▽となるべきところながら、『正節』には○▼と対応する譜記が多いこと奥村（1981:pp.445-446）に詳しい。とすれば、ここは「木へ」が○▼となるところ、それに高起式の自立語が接続したので、○▽●……となったことを示しているのであろうか。しかし、一方では「魚の……上ったるでこそ」という文脈を鮮明にするために[7]、「木へ」の部分のアクセントを抑えて施譜したとも解釈することは可能である。

（10）魚（うを）の木へ上<ノボ>ッたるで社（こそ）｛上上コ××上上コ×××××｝10下壇浦4-4口説

また2拍以上の名詞では次のような例も見られ、譜記のまとまりをよく理解しないと思わぬ誤認を犯しかねない。たとえば（11）の第一例からは「くゝりを」に前接する「袖の」に譜記がないから、あるいは「袖」が低起式の語かと疑いたくなるが、古来●●であって合致しない。施譜者の意図としては、おそらく「狩衣の袖の」と「くゝりを解いて」の二つの句に分けたものであろうから、ここは「袖のくゝりを」という句を抽出して考えてはいけないことになる。下記第二例も、名詞ではないが「また」を低起式と理解したくなる。しかし、文脈上直接「仙洞に」に続かないから、そのような解釈はできないで

あろう（「また」は古来●○）。

(11) 狩衣の袖のくゝりを解いて ｛上コ×××××上上上コ×××｝ 7下重斬30-3口説／忠盛また仙洞<トウ>に（最愛の女房をもって）｛上上××××コ××××ー｝ 1上鱸3-3口説

このように、無譜部分をアクセント資料として利用することは一律にはできない。前述の「前高低平形」と同様、ここに説明した「低平後高形」も、これだけからアクセント型を認定することは危険である。

各語の検討

和語と漢語をあわせて『正節』から採集できる1拍名詞は56語である。和語は第一～第三類相当まで3グループに分れる。漢語は、和語の第一類相当と第三類相当に所属するものがあるだけである。以下、『正節』の譜記から分類可能な語を先に記し、他のアクセント史資料から推定した類別に、『正節』の譜記が抵触しないというだけのものを（ ）内に記す。／の後は漢語である。

◆第一類相当　語単独で●型　　確定18語、推定8語、計26語

子、此、巣、瀬、誰、身、世、緒／儀、故、赦、書、祚、他、地、非、理、櫓（蚊、毛、血、戸／医、期、無、余）

◇「毛」は『正節』の譜記からは類別を特定しづらい。「毛の」が●▼であらわれるので、まだ第一類相当であった可能性が高いと考え、ここに入れる。ところで「身の毛」はすでに一語並みだったらしく、●●○と対応する譜記が施されている。現代京都はH1型●○○（日国）でH2型●●○から変化したとみられる。

(12) 身の毛 ｛上上×｝ 2上鵺10-1白声・2上文強12-1白声

◇「瀬」には次の第一例ように低起かと疑われる譜記がある（「機会」の意）。この場合は●●●▼▽という音調が期待され、実際そのような施譜もなされている（第二例）。

(13) 此瀬にも ｛上コ×××｝ 6上有王4-4口説／此瀬にこそ ｛上上上上上×｝ 2上足摺17-4白声

『正節』では、連体詞「この」「その」を冠した場合には、続く語に施譜されないことがある。これは《白声・口説》の違いによることではない。また、「此の界・其の儀・此の度・此の後・其の後」など比較的頻用される語句を含むとはいえ、必ずしもそうではない語句（「此の状・此の仁・其の間・其の料」など）にもあらわれる点、どうしてこれらに限って、「此の/其の」●●＋○……などと後部のアクセントが抑えられるのか解釈しづらい。しかし「此の度」は現代京都●●○○であって、『正節』の譜記と対応する。●●●○からの変化形であろうか。「此の頃」は連濁もするが、『正節』●●●○に対して『近松』（坂本1987）は●●○○である。

◇「期」は呉音ゴ平声で、現代京都H0型（日国）。次の例は低接式助辞接続形であるから、この譜記からは第一類・第三類いずれの可能性もある。しかし第三類相当であれば、《口説》の場合はむしろ○▼になりがちで、ここは一応、現代京都アクセントに寄り掛っ

て第一類相当に分類する。

(14) 期゛として ｛コ×××｝ 8下戒文23-1口説

◇「無」は呉音ム去声で『正節』に (15) のようにある。低接式助辞接続形であるから類別は判定しがたい。「期」と同じく《口説》の例でもあり、第一類相当に分類しておく。

(15) 無<ム>といふ (文字斗゛) ｛上×××－｝ 12下道逝13-2口説

◇「地」は「天地」の「地」である。「地に」｛上コ｝《口説》3例から第一類相当と判定される。しかし次の例はむしろ低拍を思わせる譜記である。「地」は漢音チ去声、呉音ヂ平声で「地に伏して」などという場合は漢音で読まれたものらしい。

(16) 胡の地[ス]に ｛上上××｝ 2上蘇武12-1口説〔早尾京B ｛同｝〕／九条の地を ｛上上上コ××｝ 3上新都2-4口説〔早尾 ｛同｝、京A ｛同、ただし「地」に朱で[ス]とあり｝〕

上記 (16) の例は「前高低平形」であるから「地」のアクセントを反映する例とすることは俄かにはできないが、「胡」については漢音コ、呉音グ・ゴであるから、これも漢音平声で読まれたと思しい。すると「胡の地」は古く○▽+◑で、さらに●▽=○から●▼=○へと変化したものであろうか。一方「九条の地を (割ラれけるに)」はむしろ呉音ヂと読まれたか (京大本には漢音チと読むよう指示が加えられているが)。ヂは金田一 (1980) のいわゆる「b類」(第三類相当) の語。

◇第一類相当の語には「め (女)」を「女の童」から抽出することも考えた。「わらは (童)」は近世●○○であるから、この語は●▼+●○○が熟して用いられるようになって●●○○○に転じたものであろうか。しかし、古く「め (女)」が◑で、「わらは (童)」が○○●であった時代、すでに〈平平平上平〉(図本名義126-7) と一語化したアクセントがあった様子だから、これから規則的に変化して●●○○○になったと考えた方が自然だろう (秋永1980:p.27参照)。したがって「女の童」の施譜例から近世の「め (女)」のアクセントを直接知ることはできないものと判断する。

(17) 女(め)の童ワに ｛上上××××｝ 7上法遷2-3口説

◆第二類相当　語単独で◐型　　確定5語、推定3語、計8語

名、日、歯、矢、屋 (江、音(ね)、葉)

◇「屋」は《早語類4→1#》とされるもので、「古くは◑のちに●」と推定されるが、今日単独で使用されることは少ない。現代京都は◐とも●とも、また◑とも (日国)。『正節』には3例あって、次のとおり。

(18) 好キ屋作ッて (とらせ) ｛×上×コ××××－｝ 11上妓王3-3口説〔尾早京A芸 ｛同｝〕／屋を ｛コ×｝ 7上栄花10-4口説〔尾早京A芸 ｛同｝〕・10上慈心20-5口説〔尾早京A ｛同｝〕

第一例は形容詞連体形「好(ょ)き」｛×上｝に続いて「前高低平形」であるが、これが低起性を反映するのなら、契沖の『通妨抄』(坂本1994) の〈去〉と符合する。第二例は、第二類相当の語にあらわれる譜記で、これは◐と推定してよいものである。ともに同じ《口説》の例であるから、いずれとも決めかねるが、前掲 (8)「屋ども」の譜記からは

◐がふさわしい。

◆第三類相当　語単独で◑型　　確定15語、推定7語、計22語

木、田、乳(ち)、手、野、火、目、湯、夜(よ)、輪、吾(わ)／苦、句、座、絵（鹿(か)、津／賀、胡、妓　ほかに紀伊・摂津も）

◇「手」は一般的な意味のほかに、『正節』では、「手傷・手勢・方面」の意味で用いられたものにも施譜されている。いずれも第三類相当であることは動かないが、「手傷」の意味では次のような例がある。

(19) 手負イ　｛上××｝　12下横田24-5素声／手負たるか　｛上×××××｝　14上一魁29-3素声／手負ひ　｛コ××｝　揃物大衆25-5口説

上記（19）は「手」◑を反映した譜記と考える。一方、次の（20）の例は「手負ふ」という動詞の連用形と解する方がよさそうである。「手負ふ」は連用形が●●○であるから終止連体形は●●●、「手おひしこと　｛上上××××｝」（近松、山17オ4＝坂本1988）の胡麻章と符合する。

(20) 手負ひ　｛上上×｝　8下能登18-4素声／手負<ヲ>ひ　｛上上×｝　15下遠矢7-2素声

◇「鹿」は他資料から第三類相当と考えられるが、『正節』では助詞「の」接続形が1例あるばかりで、それも●▽と対応する譜記であるから、近世直ちに第二類相当でなかったとまでは断言できない。現代京都は伝統性を失ってH0型（日国）。

(21) 鹿<カ>の角<ツノ>の　｛コ××××－｝　14下盛最6-2口説

◇「妓」は呉音ギ平声で、文字そのものを指して用いられたc形「妓と（いふ文字）｛上×－｝」（11上妓王7-2口説）の1例のみ。この譜記からは第一類相当とも第三類相当とも言えるが、呉音声調を考慮して第三類相当に分類した。

◆以上のほか「穂、尾／気(け)、四、字、地(ち)」は『正節』に「前高低平形」の譜記がみられるが、語単独の型を特定することはしなかった。ただし、いずれも他のアクセント史資料から第三類相当とみるのに支障はなさそうである。

おわりに

以上、一拍名詞を中心に検討したが、それを奥村（1981:p.262）の語彙一覧と比較してみる。まず第一類相当のものは、奥村が《白声・口説》以外の曲節も渉猟して語彙を採集し、またいわゆる連体詞の一部を分割して採録したので、「柄・其(そ)」が加えられている。しかし「毛」がないのは不審。「女(め)」は「女の童」から抽出したものであること奥村（1983）から知られる。しかし、すでに複合したものであることから、このような切り出し方はしないのが本稿の立場である。「屋」はむしろ第二類に属させる方が『正節』の実情に近い。「猪」を「猪(ゐのしし)」●○○○（動物名）や「猪熊(ゐのくま)」●▼●●（地名）などから抽出することもしなかった。「猪（ゐ）」は第一類相当なので後者は「猪の」の部分だけは規則的であるが、前者は例外処理が必要になる。「鹿」とともに●○○○型に定型化していたのではないか。

第二類相当のものに「彼・彼(あ)(そ)」を本稿で落としているのは、連体詞の処理が異なるため

である。また本稿では、第三類相当に「乳・輪」を加えた。「乳(ち)」は「おんち（御乳）」からの推定である。「穂」の類別に躊躇したのは、『正節』の譜記（「穂にあらはれて ¦××上コ×××¦」4上二后10-4口説）が、その語に積極的な施譜をしたかどうかを疑ったからで、理由なきことではない。「山マの根をまはり ¦×××××上コ×¦」（7下燧合6-4口説）から「根」を切り出さないのも同様である。「根の井」●○○（人名）から「根の」のアクセントを抽出することもしない。もちろん「分析的立場」に立っても説明はつくが、古くすでに一まとまりの姓名になりきっていたのではないかと考えたからである。これと同様な「瀬の尾」●○○を分析しては説明できないこととも関係する。また「卯」を「卯の刻」などから抽出して掲げることもしなかった。この語は古く第三類相当であったが、現代京都ではもはや◐型（中井・日国）であり、『正節』の頃とて語単独でどれほど伝統的なアクセントを継承していたかわからない。「子(ね)」を「子の刻」から抽出しないのも同様の理由による。「二・四」を「二の宮・四の宮」●○○○から抽出しなかったのは、これを1拍名詞のd形とみなすよりも、それぞれ4拍の名詞とみた方がよいと考えたからである（○▽●●＞●○○○）。しかし、いずれも呉音平声であるから、文節単位に切り出して○▽＞●▽の変化を経たとも説明できなくはない。これについては奥村（1993）にも言及されている。

『正節』の詞章からも明らかなように、その語彙は江戸中期の京都語として、必ずしも生きて用いられていたものばかりではない。したがって現代京都で伝統性を失い、類別の異例をなすようなアクセントの語を、江戸中期とはいえ中古以来の枠組みで分類して済ますのは危険なことである。少なくとも『正節』の譜記から知られる範囲を明らかにして、当時のアクセント型を確定できるものと、他資料からの推定に『正節』の譜記が抵触しないという程度のものとを、はっきりと分けて考えた方がよいと考える。本稿で提示した認定の原則とは、そうした検討のための拠り所となろう。

注

(1) 音楽的曲節からの推定を不可能だというわけではない。しかしそこには手続きとして、平曲の旋律と「墨譜群」（石川幸子1995.12）との対応を確認し、その旋律的制約とことばの音調との対照をつぶさに行うことが求められる。その意味では、金田一春彦（1982:pp.84-85）も指摘するように「旋律の推定」も必要になろう。

(2) この点、奥村（1981）などの立場とは違いがある。たしかに奥村も《白声・口説》を中心にしている点では変わらないが、一方で他の音楽的曲節の例も採用しており、またそれのみから立論することも少なくない。また、いかに音楽性が乏しいとはいえ《口説》には旋律的な問題がある。それは奥村が「特殊低起式表記」「語頭低下」と呼んだものであり、のちに石川幸子（1991）が低く始まるアクセント型の認定に注意を促したところでもある。しかし、主として1拍名詞を扱う本稿では余り問題にならないので、別に論じたい。

(3) このほかに ¦上中上¦ の譜記が付けられたものが「日」に1例（「日出ダいたるを ¦上中上×××××¦」1下那須4-1口説）ある。¦上中上¦ はヒィイダイタルのヒィイに当る。

(4) これついて桜井茂治（1984:pp.148-149/p.998/pp.1184-1185）また同（2000:pp.262-274）は、○

▼から●▼への変化を「個別的変化」として認めている。

(5) 奥村（1981:p.328）は地名「田の浦」から「田の」を抽出しているが、地名などの固有名詞は別に変化している可能性もあるので、「木の下」（馬名）とともにしばらく検討対象から外す。

(6) 接頭辞「おん」は、そのアクセントの面で独立性の強いことが次のような譜記からも知られる。「御ン後なる ｜×上×コ×××｝」（10上鹿谷12-１口説）・「御ン声をも ｜×上×コ××｝」（12上僧死29-１口説）・「御ン精ウ進゛ンの ｜×上×コ×××｝」（12上御産19-３口説

(7) なぜ文脈を鮮明にする必要があったかとなれば、それは平曲を聴く人に理解しやすい語り方が求められたからである。平曲家がそのように施譜して、聴衆の耳に理解しやすくしたとも言える。すべての語や文節のアクセントを明確に語っては、細切れの音調でまとまりがないこと著しい。平曲家がその解釈によって、どこを明らかにし、どこを抑えるかを決定した。譜本は、その一つの解釈を、演奏家に対し規範として示しているものと考える。もちろん演奏家が譜本どおりに語らないことはありえたであろうが、ここに問題にするのは『正節』という譜本から推定されるアクセントであること言うまでもない。

【参考文献】

秋永一枝（1980）『古今和歌集声点本の研究』研究篇上　校倉書房

秋永一枝ほか（1997・1998）『日本語アクセント史総合資料』索引篇・研究篇　東京堂出版

石川幸子（1991）「音韻資料としての平曲譜本」『国語学会平成三年春季大会要旨』

石川幸子（1995.4）「平曲譜本――イントネーションから解釈へ――」『国語国文』64-4

石川幸子（1995.12）「平家正節とアクセント」『国語学』183

石川幸子（1997）「平家正節の解釈について――墨譜を手がかりに――」『国語国文』66-12

奥村三雄（1983）『平家正節語彙索引――節ハカセ付き語彙集成』大学堂書店

奥村三雄（1981）『平曲譜本の研究』桜楓社

奥村三雄（1993）「平曲のことばと旋律――音楽性から語音形へ――」『平家琵琶――語りと音楽――』ひつじ書房

金田一春彦（1959）「平曲の音声」上・下　『音声学会会報』99・101→金田一（2001）

金田一春彦（1980）「味噌よりは新しく茶よりは古い――アクセントから見た日本祖語と字音語――」『月刊言語』９-４

金田一春彦（1982）「〔書評〕奥村三雄著『平曲譜本の研究』」『国語学』131

金田一春彦（2001）『日本語音韻音調の研究』吉川弘文館

薦田治子（2003）『平家の音楽――当道の伝統――』第一書房

坂本清恵（1987・1988）『近松世話物浄瑠璃　胡麻章付語彙索引』体言篇・用言篇　アクセント史資料研究会

坂本清恵（1994）『近世上方アクセント資料索引』アクセント史資料研究会

桜井茂治（1984）『中世京都アクセントの史的研究』桜楓社

桜井茂治（2000）『日本語の音・考――歴史とその周辺――』おうふう

中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版

上野和昭（2000・2001）『平家正節　声譜付語彙索引』上・下　アクセント史資料研究会